

# レビー小体型認知症サポートネットワーク京都 第7回交流会 活動報告書

日時：2019年7月6日 13:30～16:00

場所：京都府立医科大学臨床講義棟

内容：医師の講話とグループワーク

参加者：45人

京都での交流会は2年目を迎えました。協力医の先生やケアスタッフも少し増え、これからもDLB患者およびご家族のサポートが少しでも充実できればと思っています。今回は、協力医である、京都府立医科大学の近藤先生にご講演いただきました。レビー小体型認知症とはどのような病気なのかを丁寧にお話しいただきました。一部抜粋ですが、講演内容を報告します。

## ➤ 講話テーマ「レビー小体型認知症の認知機能障害～DLBでは何がわからないのか～」

講師：京都府立医科大学脳神経内科 近藤 正樹先生

DLBでは何がわからないのか。最初は記憶障害が目立たない。注意力が低下したり、手順通りに上手くできなくなる。視覚に関係した症状が出現する。DLBでは、記憶障害はアルツハイマー型認知症より軽度であるが、描画が上手くできないなどの視覚校正機能、視覚認知機能の障害が見られる（皮質性認知症）。また精神緩慢や注意の障害がみられる（皮質下認知症）。認知機能の変動が一日の中でも繰り返起こる。

幻視と錯視の違いについて。幻視は実際には見えないものがありありと本人には見える症状。錯視は、洗濯物を人が立っているように見えるように、無意味なものを意味のあるものとして知覚することである。

## ➤ 交流会

3家族と医師、ケア専門職が1グループとなり、概ね8～10名、5グループで交流会をしました。交流会で話された主な内容は次の通りです。

- ・薬の調整は、患者それぞれの症状の出方などを相談して決めることが必要で、普段の様子をメモして医師に伝えるとよい。
- ・幻視や錯視の対応として、患者は本当に見えているのかなと思うことも必要であり、家族に聞いてみてはどうか。家族は見えていなかったら見えていないと答える。暗い時に幻視・錯視が見える場合が多いので、明るくすることも対応の1つである。
- ・DLB症状の対応として、薬と周囲のサポートの両輪である、生活習慣や腸内環境を整えることも大切。などなど、80分間の交流を持ちました。

## ➤ 参加者の声

- ・少しだけ気持ちが楽になった
- ・病名にあまりこだわらず向き合っていきたいと思った
- ・同病者の方の話を聞いて、接し方や受け入れ方を考えさせられた